〔書評と紹介〕

福田友之著

『津軽海峡域の先史文化研究』

工藤　清泰

我が先輩・福田友之氏が大書『津軽海峡域の先史文化研究』(A Study of Prehistoric Cultures in the Coastal Regions of the Tsugaru Channel, Northern Japan) を上梓した。著者は、まさに津軽海峡域の古代をモノの存在という視点から追及して四十年、出土した考古学資料である「遺物」を丹念に丹念に調査・集成・分析しつつ、海を渡った縄文人等の交流を明らかにしている。さらに、巻末に挙げた引用文献八三九点という数は、いい加減な引用を嫌う「福田イズム」を如何なく発揮している。初出論文は一九七六年から二〇〇八年の間であるものの、その後の成果を付け加えた十四項目を付章として集約しており、津軽海峡を語るための、考古学研究者必携の書である。

「なぜ原始の交流と言わないのですか?」との問いに「先史という言葉が好きだから」と答える著者。文献に対峙する「先史」という言葉にこだわる姿勢は、著者に影響を与えた先学を踏襲する気持ちに変化がないことを主張し、三内丸山遺跡が脚光を浴びるころから、縄文時代を「原始」という言葉で言い表すことに違和感を感じると言い始めたことに対応するらしい。

本書は、六章で構成され、それぞれ第Ⅰ章「縄文文化」、第Ⅱ章「交流・交易」、第Ⅲ章「装身具」、第Ⅳ章「貝の流通」、第Ⅴ章「漁猟・祭祀」、第Ⅵ章「特殊遺物」のそれぞれのキイワードが各節を総括しており、その内容は以下の通りとなっている。

序

第Ⅰ章　津軽海峡域の先史文化

1　津軽海峡と亀ヶ岡文化／2　津軽海峡と縄文文化／3　三内丸山遺跡と津軽海峡

第Ⅱ章　津軽海峡域の文化交流

1　津軽海峡の先史文化交流—青森県出土の黒曜石製石器・硬玉製品・外来系土器—／2　亀ヶ岡文化圏の物の動き—東北地方北部の黒曜石・ヒスイ製品を中心として—／3　津軽海峡域を巡る黒曜石の動向／4　オンネアンズと糸魚川／5　ベンガラの利用と交易／6　津軽海峡を巡る交易の品々

第Ⅲ章　津軽海峡域の装身具

1　ヒスイ以前の津軽海峡域／2　津軽海峡域における玦状耳飾り—三角型玦状耳飾りを中心にして—／3　津軽海峡域における先史ヒスイ文化／4　首飾りの色—本州北端・縄文晩期の例から—／5　青森県出土の琥珀／6　津軽海峡とサメの歯—本州北辺地域出土のサメの歯をめぐって—

第Ⅳ章　津軽海峡域の貝類文化

1　北日本におけるベンケイガイ交易—津軽海峡を渡った貝輪—／2　津軽海峡域と南海産貝類—津軽海峡域におけるイモガイ形製品をめぐって—

第Ⅴ章　津軽海峡域の漁猟・祭祀

1　津軽海峡域における土器片錘―下北半島発茶沢（1）遺跡の資料をもとにして―／2　縄文期のサケ漁具2例―民俗資料との比較から―／3　本州北辺地域における先史アスファルト利用／4　宇鉄遺跡の石銛装着―津軽海峡南岸の恵山文化期の例―／5　津軽海峡域における動物装飾付き土器と動物形土製品／6　津軽海峡交流と弥生石偶―青森県畑内遺跡出土の石偶をめぐって―／7　弥生の水田稲作と津軽海峡域

第Ⅵ章　津軽海峡域の特殊な遺物

1　ロシア連邦国立極東博物館所蔵の大型磨製石斧／2　津軽半島今津遺跡の鬲状三足土器―「江南文化和古代的日本」に関連して―／3　津軽海峡と青玉象嵌

付　章

1　津軽海峡と亀ヶ岡文化／2　津軽海峡を巡る黒曜石の動向／3　ベンガラの利用と交易／4　津軽海峡域における玦状耳飾り／5　津軽海峡域における先史ヒスイ文化／6　青森県出土の琥珀／7　津軽海峡とサメの歯／8　北日本におけるベンケイガイ交易／9　津軽海峡域と南海産貝類／10　津軽海峡域における土器片錘／11　本州北辺地域おける先史アスファルト利用／12　津軽海峡交流と弥生石偶／13　ロシア連邦国立極東博物館所蔵の大型磨製石斧／14　津軽半島今津遺跡の鬲状三足土器

以上の表題を見渡して、読者諸氏は考古学的な分析項目のうち、遺構に係る部分が全くないことに気付くと思う。著者の問題意識は完全なる「遺物論」であり、かつて聞いた次の会話を思い出す。

「現在の自分が住んでいる集落も分からないのに、縄文時代の集落論が書けるわけがない」

このような意識から発している「遺物論」への拘泥は、第Ⅰ章第1節に示された通り、一九七六年『どるめん』第十一号に発表した「津軽海峡と亀ヶ岡文化」から始まる。道南から青森・岩手・秋田の四十二か所の遺跡を抽出し、亀ヶ岡文化期の遺物を紹介しながら、丸木舟での海峡渡海のイメージをふくらます。遺物の図版は、縮尺も統一されておらず、現代的な研究感覚からすれば如何なるものかと言われることを、あえて承知しながら原典のまま使用する著者の初出論文に対する強いこだわりを感じることができる。ちょうどこの時期、大学で「亀ヶ岡文化論」という卒業論文を構想していた筆者の目からすれば、縮尺の統一されていない図版でもこれだけの遺物を集成した努力に脱帽したこと、さらに、執筆者が我が研究室の先輩であったことに驚いた記憶がよみがえる。

紙幅の関係もあるので、以下は、章ごとに特徴ある項目について詳述したいと思う。

まず、第Ⅱ章は垂柳遺跡発見の先駆者・伊東信雄先生の追悼論文集（一九九〇）に提示した論文の「黒曜石」「硬玉」「北海道系土器」から始まり、以下の論文では「ベンガラ」・「ヒスイ」・「琥珀」・「アスファルト」・「貝製品」を考察対象として第三章に連続する。著者は、八〇年代から全国各地に産出する黒曜石・ヒスイの産地分析を先導した一人として知られており、当時の問題意識を彷彿とする論文が随所に続く。

第Ⅲ章は、葛西勵先生の還暦記念論文集（二〇〇五）に提示した「ヒスイ以前」の装身具から始まり、縄文時代前期中葉が装身具の画期であ

り、三角形玦状耳飾りからヒスイ垂飾りへ変化すると結語するが、具体的な内容は以下の論文で詳細な分析を行っている。さらに、著者は「首飾りの色」にまで考察を進め、赤・黒・緑（青）・白という縄文色を民族・民俗的な視点から追及している。この色彩に対する結語は、『古事記』『万葉集』を通じて純粋に色彩語と認められる日本語は、「青し」「赤し」「白し」「黒し」という四つの形容語に限定されるとした国文学者・佐竹昭宏（一九八六、『古語雑談』岩波新書）の結論と同じであり、まさに古代における日本列島人の色彩感覚が文献からも、出土遺物からも一致したことを示す。

また、ヒスイは海峡両岸に存在しているにもかかわらず、「サメの歯」は、北海道の墓壙内副葬にはあるものの本州側ではほとんど無い事実を示し、縄文時代早期から晩期、続縄文時代からアイヌ文化期まで連綿と続く「海峡を障壁とする北海道文化」が形成されていたことを明らかにしている。

第Ⅳ章は貝類文化である。ベンケイガイは貝輪としての装飾製品としての特色を有し、著者が平成二・三年に発掘調査した国史跡・田小屋野貝塚からの出土を契機に、同三〜六年まで秋田県能代から津軽半島や下北半島・太平洋沿岸・陸奥湾沿岸を踏査し、ベンケイガイが採集されるかどうかを足で確認している。さらにイモガイは、著者の恩師・芹沢長介先生が是川遺跡から出土している同貝の土製品を示し、岩手県や北海道では石や土でまねている製品が存在していることに呼応し、そのあり方を追及した論文であり、タカラガイ・オオツタノハガイなど南海産貝類を模した製品をつくる意義を探っている。ここでも著者は石垣島・奄美諸島とともに伊豆大島の海岸線を踏査しており、この章にみられる著者の目は、実証考古学の視点である。

南海産の貝は、古代中国での使用以来、威信財としての評価が得られるものであり、前述したサメの歯とともに文化人類学的には、いわゆる「貨幣」概念としての価値を有することでも知られている。「貝」を追及することは貨幣を理解することにつながる。この章はわずか二編の論考であるが、考古学あるいは人類学の学史に残る論文である。

第Ⅴ章は、土器片の錘、サケの漁具、時代別・用具別のアスファルト利用の集成、恵山文化期の石銛、動物装飾付き土器と動物土製品、弥生時代の石偶、弥生の水田稲作と海峡域という七編のテーマを提示して漁猟と祭祀を主題としている。縄文時代から弥生時代にかけての生業は当然ながら狩猟・漁猟・採集を中心とするが、稲作農耕の北上と弥生・続縄文文化の接触状況から、いかなる文化が生まれてきたのか。

本章の論文テーマは先史時代の「サケ・マス論」を提唱した山内清男先生とも音信のあった著者にあっては、漁猟を呪縛のように唱えながら意識の奥にとどめざるを得ない研究姿勢を見出すことができる。祭祀に関する解釈も、北海道で発掘経験があり、それも二〇代後半に全道域をフィールドとした著者ならではの感覚であり、「アイヌ文化」をベースとした考察は著者の人生を垣間見る思いである。

第Ⅵ章は、津軽海峡域の特殊な遺物として、大型磨製石斧・鬲状三足土器・青玉象嵌（玉象嵌土製品）・内反り石刀を取り上げている。大型磨製石斧は極東ハバロフスク・朝鮮半島、そして津軽海峡を挟む北日本域で出土し縄文時代草創期からみられ後期・晩期に多くなりデポとして

の出土もあるという。鬲状三足土器は、今津遺跡・富ノ沢遺跡の例を挙げ、研究史も加えて考察しており、結語としては、大陸由来の鬲に関する情報がヒスイ交易経路を経由して本県域・津軽海峡域に伝搬した結果、芸術性の高い亀ヶ岡文化の土器製作者（著者は陶工という）によって具体的な形に表現された土器としている。玉象嵌土製品は、著者が勤務していた青森県立郷土館の風韻堂コレクションにある宇鉄遺跡出土品から筆を進め、児玉大成氏の集成を踏まえて技術的背景や性格・用途を考察したものであり、中国の研究者との交流を通して、中国大陸における春秋戦国時代（紀元前八～三世紀ころ）の影響を追及している。以上の遺物は、いずれも大陸との人的・物的交流を示唆する資料と考え、著者は津軽海峡が海の道としての機能を有していたのではないかと推測する。

日本列島は北東アジアに位置していること、大陸との接触抜きに歴史的事象を理解できないこと、さらに津軽海峡域が情報の道としての機能を有していた興味深い土地柄であったことを想起させるに充分な論考である。なお付章は、資料補足であることから紹介を略す。

本書における著者の問題意識は「序」と「あとがき」に詳しいので参照願いたいが、まだまだ追及しなければならない課題が多いことを記した上で、津軽海峡から賜わった先史文化の存在意義を強調している。人間が獲得したものではなく、自然から賜わった恵みに生かされる「先史人」の存在を伝えるこの感覚は、実はアイヌの人々や古来の日本列島人が有している「自然共生」の思想であることを感じる。

なお、全編を通じて気がついた点を挙げるとすれば、著者が日頃から主張する読み手に配慮した記述は、遺跡名はもちろんのこと、とかく自己中心的な言葉を使う考古学用語に振られたルビによって徹底されており、若い考古学研究者には気に留めていただきたい問題意識である。

また、最初に本書を手に取った時の筆者の違和感として、津軽海峡を挟む分布図が二十二点ほどあり、統一的な仕様にした方が読者にとって親切ではないのかという疑問をもったことである。ところが、読み進める段階になると、執筆年代の空気を反映した分布図や遺跡地名表が存在することによって、ここ四十年の学史になっているのだと妙に納得するようになった。その上で、本書で唯一不足していることは、著者の得意分野である「学史」の記述がないことであり、先史以降も含めて海峡交流に関する学史の記述、あるいは全時代の津軽海峡文化史を編集する著者の姿を期したいと思う。

最後に著者は、二〇〇八年の退職後、『私の考古学ノート―北の大地と遺跡と海にひかれて―』（二〇〇八）、『北の考古・民俗雑考集―本州最北の文化と向き合って―』（二〇一二）を自費出版した上で、『青森県の貝塚―骨角器と動物食料―』（二〇一二　北方新社）を上梓しており、執筆の軌跡として紹介しておくとともに、本書のあとがきには故人への感謝も記している。恩師・村越潔先生と御両親はもちろんのこと、最愛の妻であった千鶴子さんに対しては、明確に記述しないものの三回忌の日に擱筆するという日付をみるにつけ、我が先輩の心の襞を感じざるを得ず、更なる健筆を祈念して不肖な後輩の書評としたい。

（Ｂ５判、三四四頁、二〇一四年二月、六一書房、価格一一八八〇円）

（くどう・きよひと　弘前大学國史研究会会員）